

「船頭町」子どもの頃の思い出

高司 良 恵

(会員 佐伯市宇山区)

船頭町の商店(その三)

(10) くすりやさん

横丁に山本薬店・伊藤薬店、本丁に渡辺薬店、新丁にけんこう堂(庭瀬さん)、浜丁に高司薬店の五店があったが、薬店についてはあまり子どもには関心がなく店の前を通る時、薬の匂いがしたり、ずらりと並べられた薬や宣伝のポスターが貼られていたように思い出される。

お使いで葉買いにいき「ごめん下さい。」と声をかけると奥の方から並べられた薬の間から、おじさんが出て来て用件を聞いてくれた。自分の買い物で薬店に行ったのは寒稽古の時に使うマスクであった。皮のようなレザーの感じのようなもので黒色、男女兼用であったことを覚えていいる。寒稽古よりマスクを買ってもらえる嬉しさが

あった。

・山本薬店は間口も広く大きな二階家だった。おじさんは背が高くやせ型で面長なお顔いつも和服を着て、にこにこしていた。隣の「仲よし堂」の玩具店は、おじさんの次男の方のお店で薬店の方は長男の方が引継いでいたがお二人共亡くなられ薬店の方は現在駐車場になっている。

・伊藤薬店は、現在篠崎製菓店の前にあった。伊藤薬店のおじさんは学者肌の感じのする方でいつも身支度は、きちんとしていた。奥さんは助産婦さんで、でっぷりと肥えた方で色白でとてもやさしい声が耳底に残っている。往診に出かける時は白衣を着て黒カバンを持っていた。一級下に綾ちゃんがいいたので家によく遊びに行つた。お店の中を通つて黒びかりのする階段を上つて、二階で遊んだものだった。

・渡辺薬店は本丁通りの中程にあった。現在の錦幸苑あたりだった。おじさんは病状などよく聞いてくれて、とても気安い方であった。店主のおかあさんが助産婦さんであった。小柄でたいへん粹な方でうつつすらとお化粧していつも和服で往診に出かけていた。道で出会うと気安

く声をかけて下さった。

・けんこう堂の庭瀬のおじさんは、明るい方であった。ここのお店の「仁丹」「わかもと」のポスターをはっきりと覚えていた。新丁の加嶋石油店と道を隔てて四つ角にあったが、現在は駐車場や空地となつて昔の面影は何ひとつもなくお店のあつた場所だけは、確認することができた。

・高司薬店は浜丁の下の方にあつた。高司町長宅である。長男の方が薬店をしていた。高司薬店の屋敷は浜丁と新丁に続いていた。時々遊びに行つて通り抜けることがなにかしら面白く又白壁の立派な蔵があつたことを覚えていた。現在屋敷跡は駐車場となりなにかしら一抹の淋しさを覚えた。

子どもにとつて薬店は、あまり印象的な思い出がなく並列的な記録になつてしまひ申し訳なく思つてゐる。だが船頭町には、五店の薬店が大きな店を張り活気に満ち満ちちていた様子は、はつきりと脳裏に印象強く残つてゐる。現在その五店の薬店はなく屋敷跡は駐車場や空地となつてゐる。現在大日寺横に新しく府高薬店があるのみである。

・くすり売り あれ！これ！の思い出

※とやまの入れぐすり

とやまの入れぐすりは、子ども心に興味がありよく覚えてゐる。黒い繻子の様な感じの大きな風呂敷に、小さな行季を何段かにつみ重ねて背負つて、くすりの入替に來ていた。長いおつきあいのお得意さんであるので、親しみもあり一年間の出来事や家族の病氣などについても母とよく話してゐたようであつた。くすりやさんは、耳に鉛筆をさし、残り薬を数え記帳してゐた。当時のくすりの入れ物は、厚手の大きな袋であつたが箱に變つてきた。いい箱は桐で作つてゐた。くすり袋は家の中のよく見える所に吊り下げてゐた。

わたしは子ども心に「とやまのくすりやさん」には、親しみとなつかしさがあつた。それは薬の整理と勘定が終わると、いよいよ待ちに待つたサーピスのおみやげである。まずお箸、折りたたみの紙風船、「火の用心」と書き入れた中に食べ合わせのわるいものの絵があつた小さいポスターで母は炊事場に貼つてゐた。一年近くになるとその美しいポスターも黒く煤けてしまひ貼り替ると、なんだか炊事場が明るくなつた様に思えた。

子ども向けには紙風船、吹けばサイコロ形にあくらみ六面には、絵が書かれていたが、どんな絵だったかは忘れてしまった。

幼い日を思い出し

「紙風船折目どおりにたたみけり」良恵句（季語：風船）

黒い大風呂敷を担い深々と頭を下げお札をいいながら出て行く「とやまの入れぐすり」も幼い日の忘れ難い風物詩であった。

※明治座の浪花節の「くすりうり」

ちんどんやさんが、船頭町を練り歩く。今晚は明治座で浪花節があるという宣伝隊である。浪花節の好きな父は、夕方になると早々に仕事を片付けて明治座に行った。浪花節に酔いしれた中休みの時、芸人達は客の間をぬって薬を売っていた。一対一で薬の効能を話すのでついその話に釣り込まれて父は買ってきた。朝食の時その薬の話をしてくれた。明治座は池船町にあつて寿会館となり現在はファミリーレストランになっている。夕方明治座の楽屋裏通りを通ると役者が厚化粧している所をよく見かけたが、遠い幻の様な思い出の一コマとなつてしまった。

※薬草の球根掘り

手足の捻挫には、彼岸花の球根をすりつぶして、小麦粉と混ぜ患部に貼るとよく効くといわれ、その球根掘りを長瀬の畦道に掘りに行った思い出がある。

※町角でのくすりうり

大日寺の前で薬草を並べてその効能をおもしろおかしく話しながら集まった客にくすりを売っていたことは、学校の帰りによく見かけた。

※三味線をひきながら親子でくすりうりをしていた。親子共々厚化粧して汗が流れていた。その様子をそつと遠くの方から見ているが、戦争突入後はすっかりその姿を見ることができなかつた。くすりうりもあれこれとあつたが町と共に生きていたのではないだろうかと思う今日この頃である。

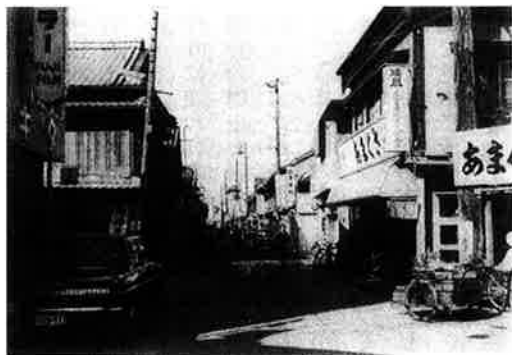
当時の船頭町は子どもも多く町ぐるみで子どもを見守っていた雰囲気があつた。それぞれの商家も活気に満ち満ちていた。戦争下物資も統制になつたり切符制になつたりして商売も下降気味になり働き盛りの男の人は出征と……戦争の波は容赦なく押し寄せ町を変えてしまった。

子ども達を育ててくれた楽しい数々の伝統行事も出来なくなり人と人とのつながりにも戦争は追い打ちをかけたが、わたし達の子どもの時代は束の間ではあったが町内にはぬくもりがあった。見えない絆に支えられていた。船頭町を歩いてみるとあの頃のぬくもりが次から次へと思い出されこの町で育てられたことを感謝し誇りに思っている。

—— 船頭町商家町並 昔と今 ——



明治40年頃の船頭町下本町



船頭町下本丁

〈さいき市報 歴史散歩より〉